

藤並城跡の発掘調査速報

先月号に引き続き、藤並城跡の発掘調査成果についてお知らせします。今回は南側の堀の調査についてです。

藤並城跡を囲む堀の中で、南側のみが地表面にその痕跡を留めていませんが、今回の調査によって南側にも堀が存在することが改めて確認できました。幅は北側より広く約6mありますが、これまで推定されてきた規模よりもやや狭い結果となりました。北側の堀と同様に室町時代に改修されており、堀底が平らな箱堀を呈しています。堀を検出した高さから堀底までは1.6mの深さがあり、堀底から土塁の上までは約4mもの高さがあります。

また、堀の底では3基の礎石が確認されました。3基の礎石が据え付けられた高さは、最大で70cm程度の差があります（写真下）。一般的に、堀に伴う施設としては橋脚が考えられますが、戦国時代以前の城跡では礎石を伴う橋脚はこれまで



手前の礎石の大きさは約60cm

発見されていないこと、橋脚としては幅が広すぎることから、現状ではどのような施設かは明らかにはできていません。

堀は堆積した土の状況から判断して、人為的には埋められておらず、徐々に埋没して江戸時代には水田になったと考えられます。

堀の中からは、備前焼などの陶器や中国製青磁の他、瓦や木製品（まけもの曲物・ひしゃく柄杓・くわ杭など）、植物の枝・種などが多く出土しています。

去る9月16日（土）に、藤並城跡発掘調査の現地説明会を開催しました。当日は台風の接近に伴う悪天候の中でしたが、約100人に見学いただきました。